

カキのノロウイルスに係る平常時の水準調査委員会(第8回)【概要】

令和3年度カキのノロウイルスに係る平常時の水準調査結果の中間報告を目的として、主要生産道府県及び関連府省庁等が集まり調査委員会(第8回)を開催した。

1. 開催場所：東京（AP 東京丸の内）、WEB 会議併用

2. 日時：令和4年3月10日 13:30～15:30

3. 出席者

主要生産道府県（13）、研究機関（公益社団法人日本食品衛生協会、国立医薬品食品衛生研究所、国立保健医療科学院、国立感染症研究所、国立研究開発法人水産研究・教育機構）、一般社団法人大日本水産会、全国漁業協同組合連合会、分析機関、関係府省庁（内閣府食品安全委員会事務局、水産庁、農林水産省（畜水産安全管理課、食品安全政策課））

4. 議事概要

（1）「令和3年度カキのノロウイルス（NoV）に係る平常時の水準調査（中間報告）」（資料1）により、令和3年度調査結果の中間報告を行った。

- ✓ 10～12月は50-70%の検体が陰性であった。
- ✓ 定性検査陽性のものはNoV濃度が1/4程度にできれば陰性とできるものが60-80%ほどを占めた。
- ✓ ほぼすべての海域で10-12月のいずれかの時期に定性検査陽性となったが、LOQを超えるものはごくわずかであった。
- ✓ 12月から一部の海域では定量値が高くなった。
- ✓ 10-12月の結果では、浄化によるNoV低減効果ははっきりしなかった。

(2) 令和 3 年度レギュラトリーサイエンス研究推進委託事業の短期課題解決型研究において昨年度より実施している、カキ中のノロウイルス低減対策に関する研究について「カキ中のノロウイルス低減対策に関する研究」(資料 2) により報告した。

- ✓ NoV 汚染カキ試料作製条件について、中、高濃度での作製条件を明らかにしたが、低濃度の汚染カキを安定して作製する方法は引き続き検討が必要。
- ✓ 放卵放精後のカキでは、検討した方法で NoV を取り込まないと示唆された。
- ✓ サポウイルスで汚染した海水中でカキを飼育するとカキがサポウイルスに汚染されることを明らかにした。

(3) 「(情報提供) 令和 4 年度食品の安全性に関する有害化学物質サーベイランス・モニタリング年次計画案及び有害微生物サーベイランス・モニタリング年次計画案(抜粋)」(資料 3) により、NoV 及び貝毒について、次年度のサーベイランス年次計画案の情報を共有した。

(3) ご意見、質疑

【令和 3 年度調査結果の中間報告について】

- ✓ 今回のカキ中の NoV 検出状況は、ヒトの NoV 感染の発生状況と整合しており、十分に検出感度が高い方法で分析できていると思料。
- ✓ 今後、今年度調査における全サンプルの分析結果が出そろった際には、令和元年度から令和 3 年度までの調査の年度間比較だけでなく、過去の国内データや他国のデータとも比較して解析していただきたい。

【カキ中のノロウイルス低減対策に関する研究について】

- ✓ カキへの NoV の結合性は遺伝子型に依存するという報告もあることから、本研究においても使用する遺伝子型によってカキへの NoV の蓄積性に影響があるのではないかと。
→ 本研究では、これまで GⅠ.7 と GⅡ.4 を使用している。NoV の患者便検体の供給が少ないこと、本研究での使用量が多いことから、複数

の遺伝子型の検討が難しかった。現在使用している NoV 検体は残り少なくなっており、今後別の遺伝子型の検体が入手できるのであれば、遺伝子型による蓄積性の違いも検討したい。

- ✓ 水準調査の結果を見ても、10～12 月のカキであれば、ウイルス量を 1 log 程度減少させればほとんどの海域でシンガポールに輸出できる水準のカキを生産可能になる。生食用カキの安全性向上への効果も大きい。一方、今回の結果で、GI のみ、かつ浄化期間を 6 日間とかなり長くとっても減少は 0.4 log 程度とのことで、低減の難しさを実感したところ。もう少し短い日数で 0.5～1 log 減らせれば、輸出や生食用カキの安全性向上へのインパクトが大きいものとする。今後の研究に期待したい。
- ✓ 実用的な観点では、0.4 log 下がるだけでもウイルス量としては 4 割くらいになり、陰性検体は多く増える。基礎研究的に考えるとあまり減少していないように思えてしまうが、農水省の事業としては対数ではなく絶対量で見るのも大切。そういった視点を忘れず研究を進められるとよいと考える。